



13
2852
1



茶番早合點

第二編 全二冊

本丁庵三馬楔 春寮軒 西宮屋 新六梓

五渡亭國貞画



茶番早合點序

菟道鴨水うさぎみづありとていごもいごも茶番ちやばん御江戸おえと乃水のみづ
 小ゆひてこゆひて上方者かみかたものよふ出で来ぬきりりと本丁庵ほんていあんの華はなれ
 花はな来き早はや合あ點てんの書かき一度いちど世よにに行いくくととよりより、ナット
 吞の込こ美み知ち次じ郎らう一いちとてとてて四よ三さんと悟さとるるどどううででもも童わらわささえ
 乃道のみち乃水のみづと産湯うぶゆととききりりと江戸えと子こ八はち鷹たか鶴つる菜ならら
 して吞の込こ速すみくく宮糸みやいとののれれおお去き産うぶととんんもも取とりり茶番ちやばん具ぐ
 景物けいぶつりと張子ちやうしのの虎こけけ字じふふばば身み初はつ土羹と羹鹿か飯いけけまま

ふもも食物茶番の趣向と学ふ学んで時景は
習ふ習ふの稽古やゆらゆらめいお師匠三馬乃教乃
通ふ一景物二趣向とて茶番とて程や
バ如何も美景とゆはば美景凝漢と笑をて
ら景も亦太平乃樂事也太平樂少のつて稽ども
茶番八江都の花ぬらこのおもひをて張地を
ささても趣向拙りて景物古きよ後時つてや
又もささるるのつてお師匠其のつてまぬの

稽でヤヤと後をてせんよの書成見たり
志くるのみあは江都の子といへる者茶番
と知もあはのあはからず茶番と志せんと思は
たり早合點とてあはもんばあは鳥は物空
小買うくと先とあはれひ春春軒の門松を
まもりて後人よる

先年吟小まきりえし家

好屋乃公羽志る成



文政七年

甲申正月

卷 中 目 録

第十一	第十	第九	第八	第七	第六	第五	第四	第三	第二	第一
茶番題夕立。櫻川慈悲成	初編此撰	作りあひり	景物五あつらひの支	景物と作るり	相方の心むらさ	其序はやうとと能は合まきり	茶番と俄狂言との差別	趣向の新まきり	場敷次踏とあむざる支	茶番の大意

全

- 第十二 題 武者尽仁田四郎。竹鳴園六吉
- 第十三 題 梅ひ友達。柳橋亭豊川
- 第十四 題 曾我役割近江小孫太。琴通舎英賀
- 第十五 題 吉野山。井本李
- 第十六 題 正月尽羽根突。亀太
- 第十七 題 曾我對面。準繩亭水盛
- 第十八 題 小太曳。柳齋
- 第十九 題 羽根突小まが。瀨川路曉
- 第二十 題 角力友達。富松曉
- 第二十一 題 富本淨瑠理。空満屋真枝
- 第二十二 題 忠臣藏十段續。三笑亭可樂

茶番早合上二編上

江戸戲作者 式亭三馬撰

茶番之大意

抑茶番の起原ハ前編小脱のりて、戲場より
 出づるものあり、新向美端劇場乃趣と離まざる
 勿論ハ理之さ狹と茶番第一の心也、戲場と離ま
 ずして劇場を離るゝのあつた、はむづうきやう
 されど、たとへば以上茶番とせも、甘んぶ、劇場乃



通つ小ぶらうと思ひながらつと孫子めをうて平生は河小
 なる小ぶら生の俸と云ふ肉小のはとあぐ又芝居に
 喰ひどくあをいふ之始より終まで劇場の報をうり
 せりたる玉子とらあんけけ重た物むの喰ふが
 どく始に尻うぬは種ともたづもそのまゝにうくふ
 さう身せし物に報とくふよと玉子とらあんけけ
 味もいふまゝに増るあまうせり新しき趣向とて人の
 目とたを驚かすもの一見物の退屈せぬ中うに氣をいさ
 る。第1のむね

第貳 場敷と踏と舞まじり

戦場小臨む初陣の時向ふは暗しと物れあり
 も見えど場敷まじり舞と向ふ時久心晴く也
 すまのいよゝ之茶番も又そのまゝ物舞臺の時
 小目も見えず身も見え次第蒙ることの目せ返して見
 物れ中小誰が居るやら行むらあうとあらぬ物あり

かくのどくあり故心冊（元）田小落（おち）法（ほう）のりして揚るなり
をり中より抱（かか）之段（だん）の場（ば）教（けう）成（じやう）あむ小随（せうずい）と目も明（あ）るに
心落（おち）つき見物（けんぶつ）と天（てん）是（ぜ）も人（ひと）と茶（ちや）たかめゆくとと下（か）下（か）チリ
有（あ）ても心落（おち）守（しゅ）辞（じ）小取（せうと）あつらふも急（い）義（ぎ）のり（き）とまき
功（こう）者（しや）小（せう）えゆ之（の）一番（いちばん）後（ご）一番（いちばん）音（おん）れ武（ぶ）功（こう）もかく場（ば）教（けう）成（じやう）
争（そう）総（そう）てまゝれるとと（と）は随（ずい）分（ぶん）音（おん）義（ぎ）せまき踏（ふみ）で一騎（いつき）
尚（そう）子の茶（ちや）事（じ）作（さく）と解（と）きまきやうに心がけべしとどこ
整（ちやう）ら知（ち）り（り）でもゆいさうなるなり

第三 趣向の新き成（な）出（で）とするなり

是（こ）て趣向（すうかう）乃（すなは）ち方（かた）品（びん）くありととども也（なり）成（な）る小
新（しん）の二字（にじ）小（せう）河（か）入（い）いう初（はつ）どよき趣向（すうかう）ととも（と）も（も）サ（サ）も
古（こ）くまゝて公（こう）甚（しん）まろしととほでけき趣向（すうかう）ととも其
時（とき）々（々）乃（すなは）ち流（りゅう）形（けい）抱（かか）あどと抱（かか）こみて新（しん）き趣向（すうかう）されば
大（だい）小（せう）落（おち）成（じやう）とるもの只（ただ）これ小（せう）河（か）入（い）新（しん）の二字（にじ）小（せう）河（か）入（い）と
知（ち）へし
流（りゅう）形（けい）抱（かか）を有（あ）る大（だい）小（せう）河（か）入（い）なるなり
流（りゅう）形（けい）抱（かか）の世（よ）上（じやう）一（いち）種（しゆ）はなるなり流（りゅう）形（けい）抱（かか）も其（その）小（せう）河（か）入（い）
上（じやう）の世（よ）に同（どう）業（ごう）多（た）しと流（りゅう）形（けい）抱（かか）の世（よ）上（じやう）一（いち）種（しゆ）はなるなり流（りゅう）形（けい）抱（かか）も其（その）小（せう）河（か）入（い）
上（じやう）の世（よ）に同（どう）業（ごう）多（た）しと流（りゅう）形（けい）抱（かか）の世（よ）上（じやう）一（いち）種（しゆ）はなるなり流（りゅう）形（けい）抱（かか）も其（その）小（せう）河（か）入（い）

あてあらかずくををうりぬ見物ホットしてなるに堪うゆうか向と飛
を二程にをるぬ八用少くも心たあきまらう

第四 茶番と俄狂言との差別

係狂言と云ふからぬやう。心持有下。不切者多る人
乃狂言茶番ハ多ク係狂言小片の物なり。と云ふハ、
人居合狂の題あり小居合抜け極して諸太刀の小僧を
相合にて居合乃ありキトめ小居合有て引込扱
景物入る室小歯磨との極と出。と云ふ
是何の縁もなく影に通りと云うくも何とも

の 是等と茶番と心持て居る人多し。歌うまき
之立出りけ狂言小と云ふとあると係狂言といふと
景物と出ると云うて。それ小歯磨ぐの趣向利屈
なと云うつけ笑を取と茶番と云ふ。け境
よく亦て混せざるやうにす

第五 其序の極多と云ふ合と云ふ

他の連中より。題と云ふ時ハまづ其連中はやうす
の及を度。尚且必出度と云ふは地の人と云ふも



大概小字合せとくまじりて、最々甚く題向小字にて、
拵合禁忌のりるど出来てその時の臨み甚迷惑
するものなり又題れ題せしむるたつ後と外連
中乃題せしむ合せとくまじりて、この場の場とまじり
題せしむ地名をれ内と心たすの長嘆めりやす
是の番組とて有くごまじり又ある人禁情化物
系をえしむる標題とて軸小とまじり離れといふ
題とまじり、意ある僅とて外連中とせし合せしむる
おく化物と軸と離れと、こゝと合せ甚くごま
くごまじりくごまじりて其序とせしむるごまじり
まじりバ化物とまじり、草者れ強くと毛物といふ
るりて、軸と離れをるりて、よまじりるので、化物と
まじりより乃、字遠とて無理小化物といふ故、題
向甚まじりくごまじり、されども其序とせしむる小
化物とぬくものあり、其後とていせしむるに、化
物のごまじり、金針物とて、大きにまじり、是れす

のる遠より骨を折てかつてくちくちとふる。されど。
頭とけり時よくく極子とせ命をせおくる。行要の心
ゆあり

第六 おまじ心持のそや

人の茶もあけおまじよのまろくろ有け時ハさつん
よく諱小類向ととひる程くらく吾復小春也
てより。おまじにせぐー多く其席小臨と急よ
頼まろく物あれぬ。おまじの中よてまもくもくひる程

あま春也ゆて心持らぐひ大ふス多シ小なるの匠
相をれ不拍ふより。商人のをて死にありてハ甚
氣の毒あるとくよくハ有る。すくおま
吾身はあつと好まば商人を引立て。義の仕能死
やうにまろくも。要のふひくえてハおまじの人吾
身はあつととすハおまじの方ハむろく。あつ
来てぞく。あつ。商人の方ハ向落のこねとある。
は持ハ相をれ頼人の自分ハあつとを好まば。落つて

物多切者ある人などえまてねむり

第七 景物を作らる

景物とひつた色を金草を加く其品と云はる
とありまてねくして甚くやうある人ま油の
曲めくま(ま)まて二つ或ハ二つ瓶子大万大音
まてまて對面の紋をひきひきねくけりまて
まても其品と云はる物にまてまて
まてまてまてまてまてまて
但一色もまてまて
まてまてまてまてまて

第八 景物を取あつたのり


景物を揃へたる金草のまてまてまてまて
まてまてまてまてまてまてまてまて
又まてまてまてまてまてまてまて
まてまてまてまてまてまてまてまて
まてまてまてまてまてまてまてまて
まてまてまてまてまてまてまてまて
まてまてまてまてまてまてまてまて
まてまてまてまてまてまてまてまて


第九 作り物乃り

けいせいのついでに種こしぬき作らるる其のたを
あてて出すものあり好すかぬるの細工の手
際と見せしむるものと。本番は本意小の成其上
取わぐ一する時久の物小粒の形計乃あとなを
見ぐる一きぬ前よりものごとく景あつて其後
めてきふせよとすべし

第十 初編の供

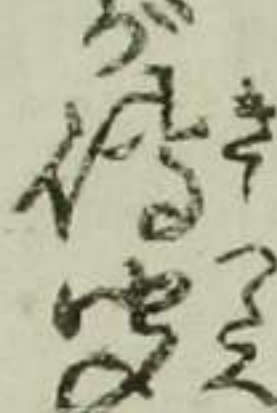
初編にいはれ投聖は角力の景物乃固小霸王樹

の神植  かくれとをいへる

是の  如く形の霸王樹を股聖の津と云ふ

よるかもしいと云ふ。尚人の作意あり土依りの

形しては津投聖も限らぬるにて甚味

早  爲の形よりして妙業を空らせし

甘んがぬる世のを告するもの

題夕立

櫻川慈悲成

正當なるつひ大木の松とてふる星橋はつゝの立雲あり
櫻川羽折美風一也とてふる幕あり

櫻川 是はけいせいの位居い守者でらる。今日只はさる言小茶

あまがみり牛うら。今さら軽向いして来らうと存

本ト まてせうふいひあう 空がたのぶらうくならせうと

一降 とち こそ後をもつがどらうらとて来てしやうと。

けいせいのやんそはと持てらるやうすと りやんそはと持て来らうと

大降 おち ふるうぬがいがまづ拵とふんごうとてあうら

と申しておきまふト 樂なまそアトをなと持て来りまうとけいせいの

ちま ちま あら後へ入こしそ拵 やらう をとてくるらうと。

ちま ちま あら後へ入こしそ拵 やらう をとてくるらうと。

たまごとと思ふ雷の庄九郎 せう さんとしよびりくしいで

ト そまやのうぎとひらこころ 櫻川 そまや そのやこそあうらとて

く く 今 いま の の 時 とき なく なく 葉 は 束 たば く く 耳 みみ と と 今 いま の の 時 とき なく なく 葉 は 束 たば く く

とあう とあう その その や や 降 ふり 出 で とも とも た た ま ま う う ぬ ぬ く く け け 出 で せ せ く く



はるをえそ幕

他一まくのやうな海をえ

横川の二字と海をえまゝに地と

「是の堪忍の二字で有らうか
あるれどもかんえんの二字と

いふ人此狂言もあるがこゝ
畧して横川の

まゝ

はかんえ

川橋

川橋

川橋

川橋

夕まぐらふては二字のまゝに

あつて林森の流まゝにふるまふあはれ只今れ

夕まぐらふては二字のまゝに踏つけられても

ころを渡すはまがのまゝに馬でらり来りま

めしてはまがのまゝに持たせてまづも湯でても

あつてまがのまゝに



一足おきては種とあげまゝに



まゝに泥籠はまがのまゝに子でらり来りま

川橋

川橋



山あけ
の

山奥屋



仁田四郎
竹鳴



曾我 役割



小友
英賀

今後の役人として
あらうがまゝとて
あつた

イヤサ名のみんと
イヤサ名のみんと
イヤサ名のみんと

思ふ宇佐美久津
思ふ宇佐美久津
思ふ宇佐美久津

穂積さあめ
穂積さあめ
穂積さあめ

かくいふ
かくいふ
かくいふ

さるぞいふ
さるぞいふ
さるぞいふ

とまごめ
とまごめ
とまごめ

ゆふひ
ゆふひ
ゆふひ

どふ
どふ
どふ

名お
名お
名お

用
用
用

おが
おが
おが

よる
よる
よる

